

曹植評伝（三）

福井佳夫

三 立太子あらし

銅雀台の競采

この章では、兄曹丕との立太子あらしについて、その経緯と結果とをかたろう。このあらしの時期は、ほぼ曹植の二十代にかさなっている。具体的には、曹植の二十歳（建安十六年、二二一）から二十八歳（建安二十四年、二二九）までである。

はじめに、この期の曹植の経歴を、年譜ふうになスケッチしておく。

二十歳のとき、はじめて平原侯（食邑五千戸）に封じられるも、そのまま鄴の地にすむ。秋に父曹操の馬超討伐に従軍する。

二十一歳のとき、父や兄弟とともに銅雀台にのぼり、「登台賦」をつくって、父から称揚される。

二十二歳（建安十八年、二一三）のとき、墓参のため、父や兄弟とともに譙へ里がえりする。父は魏公となり、「冊魏公九錫文」（潘勗の作）をさすけられる。

二十三歳のとき、臨淄侯にうつるも、やはりそのまま鄴に居住。孫権征伐に出陣した父より、鄴の留守の役を命じられる。曹丕との立太子あらいが本格化する。

二十四歳のとき、父の張魯討伐に従軍するか。

二十五歳のころ、曹操は後継を丕植のいずれにするか、なやむ。崔琰が父にころされ、曹植の妻（崔琰の兄の娘）もそれに関連して死ぬか。

二十六歳のとき、大疫等により建安七子が死にたえる。曹植は軽躁な言動（司馬門事件）によって父の怒りがかつ。そのためか立太子あらいにやぶれ、曹丕が魏国の太子となる。そのかわり、五千戸増封してもらつ。

二十七歳のとき、夭折した兄の子のために「曹仲雍哀辞」をつくる。

二十八歳のとき、関羽に包囲された曹仁の救援を父から命じられるが、泥酔して命をうけられぬという失態をおかす。同時期に、盟友だった楊脩が曹操に殺害され、身边が寥寥となる。

——以上である。

さて、二十代になった曹植、最初におこったおおきなできごととしては、やはり「登台賦」の創作と、それにまつわる状況変化とをあげるべきだろう。

曹植が「七啓」をつくってから、二年後のある春の日のこと、二十一歳の曹植は、父の曹操にしたがつて、竣工したばかりの銅爵台にのぼった。曹丕ら他の兄弟もいっしょである。銅雀台は、鄴都の西北にそびえたつ宏壮な高樓だ。高さ十丈（二十三メートル）もあって、「巍然として崇く挙がり、其の高きこと山の若し」（『水経注』

卷十」という威容と、そしてすばらしい眺望とをほこっていた。曹操が二年前にこの台の建築を命じ、この年にようやく完成したのだった。

曹植らが見晴らしのよいところまでのぼり、一服していると、父の曹操がふいに息子らに命じた。おまえたち、ここからみおろした風景を賦にしてみろ。この命をつけるや曹植、さつと秀作の「登台賦」をかきあげ、父が「この植は並みの男ではない」（太祖甚異之）と感じいったことは、前の章でもかたつておいた。

このとき曹操が高所にのぼって、諸子に賦をつくらせたのは、孔子と弟子たちとの故事を意識していたからだろう。すなわち『韓詩外伝』巻七に、「孔子 景山の上に遊ぶや、子路、子貢、顔淵従う。孔子曰く、君子高きに登れば必ず賦す。小子の願う者は何ぞや」とある。曹操はこの故事にならって、諸子たちに賦をつくらせ、おのおのの抱負をかたらせようとしたのだろう。

このとき、銅雀台からの風景を賦にしたのは、曹植だけではなかったはずだ。曹操は諸子をひきつけて登台していたのであり、他の息子たちも賦をつくったことだろう。あるいはつくろうと、こころみたことだろう。ただ「登台賦」と題する作が現存するのは、曹操と曹丕、曹植の三人だけ。父の賦は二句だけの断片なので、このときの作かどうかは断言できぬが、曹丕と曹植の作は、内容からみて、まちがいになくこのときにつくったものだろう。他の兄弟のものは残存せぬので、つくれなかったのか、あるいはつくっても逸したのか——のどちらかだろう。いずれにせよ兄弟がみなつくったなか、丕・植二人の作だけが現存するのは、やはりこの二人の才能が突出していたからだろう。

不植の登台賦

では、このとき、丕と植の二人はどんな賦をつくったのだろうか。二人の文学的な資質を比較するのに都合がよいので、ここで紹介してみよう。

まず、兄曹丕の「登台賦」を紹介すれば、つぎのようなものである。

建安十七年春、私は西園にあそび、「父つえや弟たちと」銅雀台にのぼった。すると父つえは我われ兄弟に、この景色を賦にしてみるとおっしゃった。そこで私は、以下の賦をつくったのである。

銅爵台にのぼって眺望してみると、銅雀の裝飾がみごとです。高殿がそびえて突起し、樓閣はいかめしく天をささえるかのよう。私はのんびり遊覧し、西山のほづをながめやりました。すると溪谷はまがり交錯し、草木は鬱蒼とつづいています。風がヒューと私の衣服にふきよせ、鳥は声をあげながら眼前をとんでゆきまします。なんども台上をめくって四方を觀望し、鄴の一隅をながれる川をみやったものです。

建安十七年春、遊西園、登銅雀台、命余兄弟竝作。其詞曰、

登高台以騁望、好靈雀之麗嫺。飛閣崛其特起、步逍遙以容与、聊遊目于西山。

層樓儼以承天。

溪谷紆以交錯、風飄飄而吹衣、申躊躇以周覽、臨城隅之通川。

草木鬱其相連、鳥飛鳴而過前。

曹丕はこの賦で、銅雀台からの眺めをすなおに叙している。はじめに台のようすを「銅雀の裝飾がみごとです」云々とのべ、そこからの眺望を「すると溪谷はまがり交錯し」云々とかたる。ここで曹丕は、自身の感慨を特段かたることはなく、のどかな春景色を叙する姿勢に徹しているのに注意しよう。佚文があるかもしれぬが、まず

はおだやかな叙景の行文で、終始しているといつてよからう。

では、曹植の「登台賦」のほうはどうだろうか。

明主の父うえにしたがい、高樓にのぼって景色をたのしんでいます。宮殿がおおきくひろがり、聖徳（曹操）のご活躍ぶりが目にはいりました。「銅雀台の」高門はたかだかとそびえたち、双闕は天空にうかがぶかのようです。また美台は空のうえにたちあがり、高殿は西城につづいています。私は漳水の長流をみおろし、果樹の万朶をのぞみ、またやわらぐ春風をあびて、鳥たちの声に耳をかたむけるのです。

「父うえの尽力で」帝業はりつぱにおさまり、わが曹家の「天子を補佐するといふ」願いもかないました。そして仁徳を天下にひろめ、謙讓ぶりを洛陽にしめされました。「春秋の」斉桓公や晋文公の功といえども、父うえとは比較になりませぬ。ああ、すばらしい、父うえの恵みは遠地までとどいています。わが漢朝をお助けし、四方をやすんじなされました。それは天地の広大さにひとしく、日月の輝きにならぶほどです。その尊貴さはとわにつづき、寿命も東王父（西王母）に対応する男の仙人）にひとしいことでしょう。

従明后而嬉游兮、見太府之広開兮、

登層台以娛情。

觀聖徳之所嘗。

建高門之嵯峨兮、浮双闕乎太清。

臨漳水之長流兮、望園果之滋榮。

立中天之華觀兮、連飛閣乎西城。

仰春風之和穆兮、聽百鳥之悲鳴。

天功恒其既立兮、揚仁化於宇内兮、

家願得而獲逞。

尽肅恭於上京。

惟桓文之為盛兮、豈足方乎聖明。休矣美矣、惠沢遠揚。翼佐我皇家兮、寧彼四方。

「同天地之規量兮、永貴尊而無極兮、等年壽於東王。
齊日月之暉光。」

この賦は、叙景と抒情とを一体化させた、なかなかの美文である。銅雀台からの眺めを叙するわけだから、曹植はとうぜん、前半で「宮殿がおおきくひろがり」云々と、景色を叙している。天空にうかぶかのような宮殿ややわらいだ風光が、壮麗に、そしてつるわしく描写されている。

だが、後半の「父うえの尽力で」帝業はりっぱにおさまり」から、叙述は、もっぱら父うえ、つまり曹操の功業への賛美にうつっているのに注意しよう。しかも「父うえの恵みは遠地までとどいています」や「四方をやすんじなされました」の字句をよむと、どうやら、前半で叙した「宮殿が」云々や天空にうかぶ宮殿、さらにやわらぐ風光までも、すべて父が漢朝のために尽力したので、その結果としてもたらされたのだ——といわんかのごときだ。けっきょくは、おのが父の偉大さをかたっているのだろう。

そうした父の功業をたたえる口吻は、じつにすなおな称賛と憧憬とにみちている。「ああ、すばらしい、父うえの恵みは遠地までとどいています」は、まさに彼の思いが凝縮された字句だといってよい。私はこうした字句の奥に、「彼自身も意識していないだろうが」曹植自身の功業へのあこがれを感じる。自分も父うえのような業績をあげたいなあ、というような。

父の曹操も、この賦にそうした感想をもったのではないか。兄の曹丕の賦も、即興にしてはわるくない。だが弟の植のものにくらべると、すこし平凡じやな。それに対し、弟の賦の才能は、兄のずっと上をいつているようだ。しかも文才だけでなく、さらにオレのような功業をあげたがっている。その意欲にあふれたところも、なかなかのものしい。ひよっとすると、こいつはわしの後継ぎになれるかもしれない——と。

じつさいこの賦では、宮殿や風光のりっぱさや美しさが、そのまま父の偉大さや、そして父への憧憬（さらに自身の功業意欲）につながっている。これはおそらく、邯鄲淳との面会するときとおなじで、ここでこう叙するとほめてもらえるだろうと効果を計算して、かくつづつていったのだろう。そして結果的に、その意図は、みことな成功をおさめたのだった。

ただし、前述したように、曹植はそれほど深慮できるタイプではない。だから、このときの彼の心中には、「おのが才腕を明示して、自分の評価をたかめてやるう」という野心などは、毛頭なかったはずだ。ただ、例によって彼の無邪気な顯示欲（第二章「性に任せて行つ」）、この場合は「父うえからほめられたい」という思いのままに、こつした賦をつくつたのだろう。

かくして、銅雀台での「ほめられたい」による行動は、彼の天才によってみごとな成功をおさめた。いや、おさめすぎたのだった。それによって、曹植としてはおもいもせぬことだったが、曹操の「後継者指名の」迷いをひきだし、兄との立太子あらしいが惹起してきたのである。

亡き後継候補

この時期、あるテーマをきめ、複数の者がそのテーマで詩賦をつくりあう遊び（以下、問題競采とよぼつ）がはやっていた。六朝で流行する集団創作の、はしりのようなものである。この曹親子の「登台賦」創作も、そうした遊戯的な問題競采のひとつにすぎなかった。だがこのときの競采は、ただの遊びではおならず、おおきな波紋をひろげることになったのである。¹

諸子をひきつれて銅雀台にのぼったとき、曹操は五十八歳だった。まだ壮健ではあったが、五十八といえば、

当時ではもう、いつ死んでもおかしくない年齢である。彼が勢威をまし、歳をかさねるにつれ、死後はだれが彼の後をつぐのかということが、人びとの口の端にのぼるのは、とうぜんのことだったとせねばならない。

もつともこの建安十七年（二二二）の時期、だれが彼の後を継承するかについては、曹操の脳裏においても、人びとのあいだにおいても、ほぼ予想がついていた。それはいうまでもなく、正室の卞夫人がうんだ長子、曹丕そのひとである。このとき二十六歳だった彼は、文武の両道に通じた俊英であり、人格的にも冷静かつ慎重な人物であった。そのためかこの時点で、もう五官中郎將の地位につき、また丞相副にも任せられ（曹植は平原侯）、父曹操の右腕として活躍していた。いわば着々とその日にそなえているかのときであり、周辺の人びとも、そうした存在として、曹丕に接していたのである。

かかる状況のなかで、この日、曹操は三子の曹植に対し、「並みの男ではない」という感想をもったのだった。もとより曹操はこれまでも、曹植の夙慧には気づいてはいたはずだ。しかしこの日、その非凡ぶりを実見した曹操は、あらためてこの息子をみなおしたのである。この三男坊は、あまり深慮はできぬタイプのようじゃが、詩文の才はとつもないものがある。兄の曹丕など歯牙にもかからぬぞ……。文学好きだった曹操は、この一件によって、自分の後継は曹丕できまりとしてよいのか、まよいはじめたのだった。かくして曹操の跡目をつぐ後継レースは、独走する長子の曹丕できまりとおもわれていたところへ、三子の曹植のすがたが後方に出現してきた、という状況になったのだった。

ただし、このときより以前、曹丕や曹植以外にも、後継者ならんかと期待された息子たちが、いないわけではなかった。ここでは、いささか時間をさかのぼらせ、かつて後継を噂された人物（曹操の息子）たちをふりかえっておこう。

前述したように曹操には、二十五人の男子がいた。『魏志』巻二十「武文世王公伝」には、卞氏がうんだ四人（曹丕、曹彰、曹植、曹熊）以外の、二十一人の息子たちの伝記があつめられている。その最初にくるのが曹昂（そうおう）（？～一九七）。母は劉氏。この女性は丁氏よりまえに、曹操の正室だったかもしれない）であり、順当だったら、この人物が有力な後継候補になったことだろう。なんといつても曹丕より年長だし、「当時の」正室だった丁氏に愛寵されてもいたからである。

だがおいしいことに、この曹昂はもう十五年もまえ（建安二年、一九七）に死んでしまっていた。張繡に奇襲をかけられた混乱のさなか、彼は父曹操に自分の馬をゆずり、父の身代わりになるようにして、害されてしまったからである（前述）。

さらにもうひとり、有力な対抗馬になりそうな人物がいた。曹沖（そうちゅう）（一九六～二〇八）である。曹沖は側室の子であり、生まれとしては、正室の腹からでた曹丕や曹植におとつていた。ただ、彼はその天稟により、この二人以上に、父から目をかけられていた。曹沖の稟質は、文才でもなく、勇敢さでもなく、「辨察仁愛」、すなわち適切に判断でき、情けぶかかったという人間性にあつたようだ。

曹沖の「辨察」さ（適切に判断できる）については、『魏志』の「武文世王公伝」に、幼少の折り、巨象の体重の測りかたを進言した話柄がのっている。この話は、吉川幸次郎「三国志実録」（全集巻七、八十八頁）でも紹介されて有名になっているが、私にはもうひとつの、馬の鞍がかじられた話のほうに興味ぶかい。

すなわち、倉庫においてあつた曹操の馬の鞍が、ねずみにかじられた。倉庫番は死刑になるのでは、とおそれた。これをした曹沖は彼に、三日たってから自首するようにいう。そして曹沖は、自分の服にねずみがかじつたような穴をあけ、心配そうな顔つきをして父にいった。鼠に服をかじられると不吉だそうです。すると曹操、

それは迷信で、心配はいらぬ、と彼をさとす。直後、倉庫番が、鞍がかじられましたと自首してきた。すると曹操は、身近においてあった衣服さえかじられるのだから、倉庫中の鞍がやられるのもしかたがないといって、わらってゆるしてやった——という話である。これは、「辨察」であり、また「仁愛」でもあった彼の美質をよくしめす話であろう。

曹操は、自分のもとより、不植兄弟もため「仁愛」を有していたからだろうか、この曹沖をたいへん気に入って、後継に指名したいとおもっていらしい。しばしば常識をくつがえし、破天荒なことをしてかす曹操のことだ。後継のことも、嫡子の曹丕をおしのけて、庶子の曹沖に後継を命じる可能性はおおいにあったといわねばならない。

ところがこの曹沖、建安十三年（二〇八）に病没してしまったのだった。わずか十三歳。曹植らが銅雀台にのぼるより、四年もまえのことである。曹操は曹沖の死にひどくなげき、かなしんだ。その悲痛のはなはだしきを見て、曹丕が父になくさめのことばをかけた。すると、曹操はいった。曹沖の死はわしにとつては不幸だが、おまえたちには幸いなことであるぞ、と。いうところは、立太子のライバルがへって、よかつたではないか、ということである。この曹操のことばは、彼の非情さをしめすものとされているが、また曹沖が有力な後継候補だったことを、如実にしめしたのもあろう。

後のことだが、帝位についた曹丕は、この二人の異母兄弟を想起し、つぎのようにかたつたという。曹昂兄さんは、まだ限界があつた「ので、早世しなくても、父の後継にはなれなかつたろう」が、もし弟の倉舒（曹沖のあざな）がいきておつたなら、オレは天子になれなかつたろうな。この発言をみると、曹丕も、この曹沖の稟質をみとめ、容易ならぬライバルだとみなしていたようである。

もつとも、曹丕は彼をただの競争相手とだけしか、みなしていたわけではなかった。曹丕は彼なりに、「辨察」であり、また「仁愛」でもあった弟のことを、気にいり、いとおしくおもっていたようだ。じっさい彼は、曹沖が死んだとき、その早世をいたむ「曹倉舒誄」をつくっている。そこで、曹沖の早世にふれて、つぎのようにかたっている。

何ぞ天に奪せられて、景命遂げざるや。兼ね悲しみて傷みを増し、侘^{たぐい}僚して気を失はんとす。永く思い長く懐いて、爾^{みづか}を哀しむこと極り罔^なし。

さらに践祚後も、曹沖哀悼の念はやまなかったようで、亡き弟に「贈諡鄧哀侯詔」という詔書をくだし、諡号と爵位とをささげたのだった。立場上はライバルだったのだが、それでも曹丕は、かく弟のはやすぎる死をいたみ、追善の意を表しているのである。これらの死後の哀悼、早世したので美化されたのかもしれないが、父からも、兄からも、これほどおしまれる曹沖は、やはり、よほどよくできた人物だったのだろう。

長子相続が常道

さて、丕植兄弟の話題にかえろう。

「登台賦」によって父から「並みの男ではない」と評された曹植だが、その一事ぐらいで、立太子あらそいに勝利できるわけではない。曹操の後をつぐということは、事実上は天下人になるということであり、詩文の才がすぐれるぐらいでは、とてもつとまるものではないからだ。

じっさいこの時点においても、曹植を有力候補だとかんがえるものは、父の曹操以外にはほとんどいなかったろう。やはり兄の曹丕が後をつくのだろうと、おおくの者がおもっていたはずだ。この曹丕については、これま

でもなんだか言及してきたが、彼がどうした点でまさり、どういふふうに優勢だったかについて、ここであらためて説明しておこう。

第一に、長子相続を是とする当時の世論があげられよう。曹昂亡きあととは、なんといつても、曹丕が正室たる下後の長子なのだった。長子ならざるもの（曹植は三男）を後継にすることは、通常はありえないことであり、紛糾のもとになりやすい。曹操の力で天下が平靜になりつつあるいま、そうした尋常ならざることをするのは得策でない。これが、曹操につかえる臣下たちの公論であつたらう。崔琰、毛玠、賈詡、邢顒、司馬懿など、魏国の重臣や名士は、ほぼそうした考えを有しており、「丕か植か」ということになれば、彼らはおおむね曹丕を支持するはずだった。

たとえば硬骨の臣だった崔琰は、後継について、曹操につきぎのよしのべたという。春秋の義によりますと、「長子の後継ぎにすべきだ」とあります。さらに曹丕などは、仁孝にして聡明でございませう、されば、ぜひとも曹丕さまが正統をつくべきです。臣は死を賭して、このことを主張する所存です——と。この崔琰は、彼の兄の娘が曹植と結婚しており、曹植とは姻戚の関係にあつた。それなのに敢然と、曹植でなく、曹丕を推薦したのである。崔琰の公平な人がらと、そして曹丕優勢の世論とがよくうかがえよう。

曹操の後継あらそいといったとき、当時の人びとの脳裏にうかんできたのは、袁紹と劉表の後継に関するごたごたであつたらう。あるとき曹操は賈詡にむかつて、自分の後継はだれがよいかとたずねた。だが、賈詡はなにもこたえない。曹操が「なぜこたえぬ」ととうと、賈詡は「ふとおもいついたことがあつて、すぐにお答えできませんでした」という。曹操がかさねて「なにをおもいついたのか」とたずねると、賈詡はいつた。「袁紹父子と劉表父子とのことです」と。袁紹と劉表とは、ともに長子でなく、末子や庶子に後継させようとした。そのた

め臣下をまきこんだ混乱や対立が発生し、けっきょく敗亡をまねいてしまったのである。賈詡のいいたいことは、袁・劉父子の轍をふんではならぬということであり、つまり「常道にしたがって曹丕を後継とすべきだ」ということだろう⁽³⁾。

以上、崔琰と賈詡の例をあげたが、こうした「長子相続がとうぜんであり、これを見だすと混乱がおこる」という思いは、心ある人びとが共有していたはずである。じっさい、袁紹と劉表の事例はつい最近のことであり、なまなましい悪例として、人びとの脳裏にやきついていたのだろう。

寛嚴よろしき

第二に、曹丕が天子にふさわしい人格を有していたからである。彼は、曹植が文学にのみ突出していたのに対し、文武の両道にわたって卓越した才能をもち、性格的にも冷静かつ沈着なところがあつた。それゆえ客観的にみて、曹植より曹丕のほうが、君主にふさわしい人格を有していたといつてよからう。

もっとも、曹丕については、じゅうらい、その人格をおとしめることがおこつた。陰険なやりかたで太子の地位をかすめとつた、才ある弟をねたんで冷遇した——などなど。

ただ私見によれば、そうした悪評は、後世、曹植の「七步之才」の話柄がひろまったことにより、「天才の弟をいじめめる陰険な兄」というイメージが定着してしまったことと関係があるう(第一章「幸運のひと」で前述した)。じっさいのところは、「陰険な兄・曹丕」という見かたは、かならずしも事実とはいいがたいようだ。

信頼できる曹丕評として、『魏志』文帝伝における陳寿の「評」がある。それを紹介してみよう。

文帝は、生来ゆたかな文藻があり、筆を執れば華麗な詩文がつづれた。また博覧強記であり、多彩な才腕

を有していた。もし、さらにひろい度量をもち、公平な誠実さにつとめ、また道義をこころざし、徳心をおしひろげていたなら、いにしへの賢王の地位にいたるのも、けっしてとおくはなかつたらうに。

前半では曹丕の資質をたたえているが、後半の「もし」以下では、度量や誠実さなどの点でたらざるところがあったと、批判しているかのように見える。とはいえ、この曹丕批判、古代の賢王（堯や舜たらうか）におよばないというのは、尚古の考えがつよい中国では、あたりまえのことだとせねばならない（道義や徳心などをいだけば、父の曹操などはどうなるのだらう）。その意味で、この後半部分は、貶辞をのべたというより、「文帝に、もうちょっと度量や誠実さがあつたなら、百点満点だったんだがなあ」という、無念の思いをかたつたものと解すべきだらう。つまり陳寿は、「陰險な兄」と断じて、曹丕を非難しているのではなく、おしかったなああと、残念がつているのだらう。

ただ、この陳寿評はほんの一例にすぎず、『魏志』文帝紀をひもとけば、曹丕「や、その弟曹植との関係」に関するさまざまな言動や逸話が記録されている。そのなかには、友于の情をしめすものもあるが、弟との確執や暗闘を示唆するものもすくなくない。それゆえ我われは、いかなる言動を重視し、いかに逸話を解釈するかによって、曹丕の人格を善にも悪にも、また正にも邪にも、みちびいてゆけることだらう。

そうした事情を承知したうえで、いかにも曹丕らしい「とおもつ」逸話をひとつえらび、私なりに解釈してみたいとおもつ。すると、王粲、すなわち彼の師でもあり、臣でもあつた人物が死去したとき（建安二十二年。このとき曹丕三十一歳、王粲は四十一歳で没）の話がそれ、ということになるう。

王粲は驢馬うまの鳴きこえがすぎだつた。葬儀がおわつたとき、曹丕は柩ひつねにむかつていたが、仲間たちをふりかえつていった。「王粲どのは驢馬の鳴きこえがすぎだつたな。ついでには各人が、それぞれ驢馬の鳴きこえを

模し、王どのをおくろうではないか」。そこで弔問の客たちはみな、驢馬の鳴きこえを模したのだった。

〔世説新語「傷逝」〕

曹丕は、年長の王粲に対し、臣下ではあっても、あつい友誼的心情を有していたのだろう。だから、王粲がすぎだった驢馬の鳴きこえで、彼をみおくろうとおもいたたのである。さらに曹丕は、自分ひとりで驢馬の鳴きこえを模すのでなく、仲間によびかけ、みなに鳴きまねをさせたのだった。

この場面、第三者には珍妙にうつったことだろう。そこは厳肅であるべき葬儀の場、ほんらいなら儒教の喪礼にしたがつて、悲痛な哭声をあげるべきだった。ところが、場ちがいな驢馬の鳴きまねの音が、あたり一面にぎやかにひびいたのだから。

さて、この話をいかに解釈し、いかなる曹丕像をみちびくべきだろうか。

私は、曹丕の珍妙な「礼にそむいた」見おくり、王粲を「臣下でなく」おのが友とみなし、その友の死をいたもつとするあつい友情をみる。さらに自分だけでなく、仲間にも驢馬の鳴きまねをさせたところに、彼の果敢なりリーダーシップをよみとる。そうした、身分をこえた友情や、慣例にとらわれぬ果敢なりリーダーシップは、戦乱がうちつづく漢末の時期においては、人心掌握という点で、おおきな効果を發揮したことだろう。

王粲への対応には、さらに続きがある。この王粲が死んだ二年後の建安二十四年九月、鄴で大事件がおこった。曹操が関羽との攻防で鄴を留守にしていたときをねらって、魏諷が反乱をくわだてたのである。だが共謀した陳禕が不安にたえられず、この計画を曹丕に自白した。すると曹丕は機敏に対応し、魏諷とその一味をとらえて、有無をいわせず処刑したのである。この魏諷の事件には、数十人が連座してころされたのだが、そのなかに、王粲の二子もいた。彼らも、魏諷にさそわれて仲間となっていたのだ。そのため「二子も引く所と為りて、誅せら

る。「王粲の「後絶⁵⁾てり」(『魏志』卷二十一王粲伝)、二子とも誅せられ、王粲の家系はたえてしまったのだ。曹丕、王粲が死んだときは、驢馬の鳴きまねをしてみおくったのだが、二年後には、その二人の息子をころし、粲の後継を断絶せしめたのである。父の葬儀には息子も参列したはずだから、この二子も曹丕とともに、驢馬の鳴きまねをしたかもしれぬ。それでも曹丕は、躊躇なく殺害したのである。事後、これをきいた父の曹操は、もしわしが鄴の地にいたら、王粲の家系をたえさせはしなかつたがなあ、と嘆じたという。

曹丕のこの果断な措置、「父以上に」冷酷ともいえるし、公平無比だと評することもできよう。善にも悪にも、また正にも邪にも判定できようが、すくなくとも、私情をさしはさむとせぬ資質は、みとめてよいのではない⁴⁾か。これを要するに、私は、曹丕は寛嚴よろしきをえた態度がとれ、そしてそれは、多感で放縱な弟の曹植よりも、指導者にふさわしい人格だったろう、とかがえるのである。

政治家としての力量

第三に、曹丕の政治家としての力量である。これは、弟の曹植など問題にならぬほど、卓越しているといつてよからう。

曹丕は前述したように、文武の両道に通じた俊英であった。彼はつねひろくから、漢の文帝を「賢聖の風有り」と敬慕して「太宗論」を執筆するなど、しかとした理想の天子像をもっていた。そして立太子あらしの時期においても、経世のあるべき方策をかんがえ、「典論」という政論を執筆したりしていた。きちんと万一日にそなえて、準備をしていたのである⁵⁾。『魏書』(『魏志』文帝紀注引)の「中道を乗り持ちて、以て帝王の儀表と為らんと欲す」という曹丕評は、さきほどの王粲父子への態度をみても、たしかにうなずけるものがあるとしてよ

い。

くわえてこの時期、父が想定していた政治日程として、漢魏交替が目前にせまっていた。この漢魏の政権交替は、もはやさけられぬ情勢となっており、むしろ交替しなければ始末がつかなくなっていた。曹操は九錫をさずけられ、魏公となり魏王となり、さらに建安二十二年には天子とおなじ旗旗をもつけ、出入するのに警蹕をとえることもゆるされていた。ここまで曹氏の権勢がよくなってしまうては、いまさら実権を献帝やその他の権臣にゆずりわたし、おとなしく謙の地にひっこむことなど、できようはずがない（もし実権を手ばなせば、だれかがかわって権力をにぎり、危険な曹一族を殲滅しにかかることだろう）。

ただ、劉氏の漢は、おとろえたりといえども、四百年もつづいた大王朝である。天下には、まだまだ漢を支持する者も、すくなくなかった。そうした人びとをなだめ、説得しながら、みずから漢帝にとつてかわり、新王朝をたちあげようとするのだ。それは、そうとう緻密にして冷静、かつ断固たる意志をもった人物でなければ、完遂させることはむづかしいだろう。

だが、後のことになるが、曹丕は、父の死後に魏王の地位をついでから、みごとにこの大事業をやりおおせた。しかも、放伐という血なまぐさいやりかたではなく、禅譲という平和的な方法でもって。じつさい、漢の献帝は帝位をゆずってから、山陽の地で天寿をまつとうしており（青龍二年 二三四 に没し、漢天子の礼で埋葬された。享年は五十四で、曹丕より長命だった）、漢魏の交替は「後代の殺伐な王朝交替にくらべると」たいへんソフトなランディングをしたといつてよい⁶。それは、漢文帝の寛容さを敬慕した曹丕ならばこそその、すぐれた政治的リーダーシップの賜物だったと評せよう。

それに対し、曹植のほうはどうだったのか。

彼は、兄が禅譲をなしとげたあと、「魏が漢の」献帝の意にそわぬことをしたとなげき、はげしく哭声をあげたという。「先帝の意を失つを傷み、亦た怨み激しくして哭す」。ということはおそらく彼は漢魏交替の必然性を、まったく理解していなかったのだらう。曹植がかんがえていたのは、自分が戦場にて、呉や蜀相手に戦功をあげる。そして父や兄からほめてもらつ——ぐらいにすぎなかったのではないか。

それゆえ曹植、もし「貴殿のお力で呉蜀を征討したとして、その後はどうされるのですか」といわれば、どうこたえたであらうか。「さあ、漢朝がそのままつづくのではないでしょうが」、「そんなことは、お父うえ（兄うえ）におききください」。漢朝や魏国の将来展望や長期構想など、「たぶん」なにもかんがえてなかった曹植は、こんなふうには、いえなかつたらうとおもわれる。

かくみてくれば、この曹植、いかに時勢をわきまえず、いかに政治音痴だったかがわかつてくるというものだ。これほど時勢への認識がとぼしくては、とうてい兄の遠謀や熟慮断行ぶりには、たちうちできるはずがなかったといわねばなるまい。

曹丕は、漢魏交替をなしおえたある日のこと、ふと弟のこの言動（禅譲後、漢献帝のために哭声をあげた）を想起した。すると、弟の非常識さにあらためて腹がたち、側近の者につきぎのようにかたつたという。ひとの心情というものは、ことなるものだ。自分が「魏の」帝位にのぼったとき、漢朝のために哭声をあげた者があつたそつじやないかと。

曹丕は、自分が粒粒辛苦して漢魏交替をなしとげたのに、身内の者（弟の曹植）がその苦心をみとめようとせず、漢献帝を気のどくがったことを、にがにがしくふりかえつたのである。わが弟ながら、なんとまあ能天気なやつだ、ぜんぜんわかつておらぬ。曹丕はそつじやないことだらう。

取りまきたち

叙述が、ずいぶんさきまですすんでしまった。兄弟が「登台賦」をつくった建安十七年、曹植二十一歳の時点にかえろつ。

丕植の後継レース、右のごとく曹丕が優勢だったが、そうしたなか曹操は、兄と弟のいずれに後継をゆだねるべきか、真剣になやみだしたのである。ただこの時期は、呉に遠征したり、故郷の譙へ墓参にいたり、父の曹操が献帝から「冊魏公九錫文」を公布されたりして、父子ともになかなか多忙だった。そのため丕植の後継レースといっても、世評にのぼるほどではなく、まだ水面下のことにすぎなかった。それゆえ兄弟は、「内心はわからぬもの」表面上はあいかわらず仲よくすごし、そして公務のあいまは、七子らと詩賦を唱和しあったりしていたのである。

ところが二年後の建安十九年（二一四）に、ひとつの動きがあった。父の曹操、孫権を討伐するため出陣しようとしたが、そのさい、曹植に鄴の留守を命じたのだ。

この「留守」の語、日本語の語感とはちがって、主君が外征や巡行にでたとき、かわって国都をおさめることを意味し、たいへん重要な役目だった。この役目、ふつつなら長子の曹丕が担当すべきだし、じじつ過去には彼が担当してきた。ところがこのたびは、曹丕も父とともに出征することになったので、弟の曹植におはちがまわってきたのである。このとき父は、曹植をいましめて、つぎのようにならせたのだ。

むかし、わしが頓邱令になったのは、二十三のときじゃった。そのころやったことをおもいだしても、なんの悔いもない。おまえも、いま二十三歳だ。「悔いをのこさぬよう」しっかりとがんばるのだぞ。

父のこの発言は、曹丕やその周辺の人びとを、おやっとおもわせたことだろう。重任の留守の役を命じただけ

でなく、わざわざ訓戒し、しかも自己の二十三歳時のことをかたつて、曹植をばげましている。こうした曹植の言動、かんぐつてみれば、いかにも曹植を後継者に期待していそうではないか。曹丕やその周辺は、これは油断ならぬぞとおもつたに相違ない。

こうした、曹植に肩いれしている「とみなされなくもない」曹操の言動によってだろうが、この前後から、曹植の周辺に取りまきたちがあつまりだした。これまでなかった動きである。「魏志」本伝は、右の曹操の訓戒のことはをひいたあと、つぎのような記述をつづける。「曹植は才能によって特別視されたうえ、丁儀や丁廙、楊脩らが右腕となって補佐した。おかげで、曹操は後継をなやむようになり、「曹丕にかえて」彼を太子にしようとしたことが、なんどもあつたほどであつた」(前引)。

丁兄弟や楊脩らが曹植の周辺にあつたのは、父の曹操や邯鄲淳の場合とおなじく、曹植の俊才ぶりに魅せられたからだろう。きらびやかな詩文の才を有すること、戦場にてでて功績をあげたいと一本気に念じていること、さらにそれらによって父曹操から一目おかれていること——これらを目の当たりにするや、楊脩や丁兄弟らは、「よし、自分はこの若者にかけてみよう」と決心したのだろう。

さらに、こんな事情もあつたのだろう。兄の曹丕に対しては、すでにおおくの重臣や名士たちが、支持の声をあげている。崔琰、賈詡、毛玠、邢顛、桓階らがそうだし、後宮の女性たちも、曹操夫人の王昭儀や知略すぐれた「曹丕夫人の」郭后など、有力な人びとが曹丕を太子におしている。そうしたなかへ、いまさら自分が参画したとしても、なかなかうだつたはあがるまい。だが、この急浮上してきた後継候補(曹植)には、まだそれほどおおくの支持者はあつまっておらぬ。いま、この新候補の懐中にとびこみ、首尾よく曹操の後継にすることができれば、この自分は曹丕側の重臣や名士たちをおしのけて……。

したがって、曹植の周辺にどつた人びとには、「曹丕の周辺にどつた人物とはちがつて」正統的君子とはいいがたい、一癖も二癖もありそうな連中がおおかつた。個々によって事情はさまざまだったが、純粹の曹植応援団というよりも、さまざまな迷惑をもつた連中がすくなくなつたのである。以前から曹植と仲がよかつたから、応援しようというのは、まだまとまなほつで、自分は兄の曹丕からきらわれているから、弟のほうに味方しよう、きらいなやつが曹丕のそばにいるから、自分は弟の陣にはいつて、そやつを蹴おとしてやるつ——などの動機をもつた連中もいただろう。

たとえば孔桂などは、『魏略』の佞倖伝にいられる人物で、ただおべっかだけで世をわたつてきたような男だつた。彼は当初は父の曹操、ついで曹丕の恩倖をこつむつていたが、曹丕がなかなか太子になれず、どうやら曹植のほうに脈がありそつだと気づいた。すると、さつと曹植の陣営に寝がえり、曹丕によそよそしい態度をとるよつになつたのである（おかげで曹丕にうらまれ、漢魏交替後、彼は収賄の罪によつて刑死させられてしまつた）。

曹植派の結成

そうしたなかで、曹植陣営の中核メンバーとして、熱心に曹植立太子を推進したのが、楊脩と丁儀・丁廙の兄弟、楊俊、荀惲などであり、邯鄲淳もそのなかにいれてもよいかもしれない。とくに前三者が、中核的メンバーであつた。この三人は、不植の立太子あらそいにおいて、植の側近としてさまざまな活躍しており、本稿でもふれないわけにはゆかない。

まず楊脩（一七五〜二一九）からのべよう。彼は名門、弘農の楊氏の出身である。父の楊彪は太尉にまでのぼ

り、さらに祖父の楊賜や高祖父の楊震らも、後漢の朝廷で高官につらなつた高潔な人びとだつた。かく徳望たかき父祖たちに比べると、彼は才こそすぐれるが、慎重な処世という点で、いささか問題があつたよつた。

『後漢書』楊震伝附楊脩伝とその注によれば、名門につまれた楊脩は、好學にして俊才があつた。建安中に孝廉にあげられて郎中に除せられ、やがて曹操にまねかれて主簿となつた。曹操の軍府は多事多端だつたが、楊脩は諸事をてきぱきと処理し、曹操から氣にいられた。おかげで息子の曹丕らも、あらそつて脩に交際をもとめたといふ。

そつした楊脩が、曹植の立太子のために尽力するよつたのである。なぜ曹丕でなく、曹植の側についたのかは、史書に記述がなくて不明だ。楊脩も文學好きだつたので、曹植のキラキラした文才に魅せられたのかもしれない。彼が曹植のために、いかなる機略を發揮したのかは後述するとして、残念ながらこの楊脩、いささか調子にのりやすいところがあつたよつた。おかげで曹操の不興をかつてしまった。同伝はつぎのよつ二つのできごとをしるす。

ひとつ。楊脩は、家を不在にするさい、曹操から下問があるやもしれぬとおもつた。そこで、あらかじめ「複數」の回答をつくつておき、留守居の童子に命じて、その順に上奏させた。曹操は、楊脩の返事がいつもはやいのをいぶかり、部下に調査させた。かくして、回答がすぐ上奏される事情をしつたのだつた。

もうひとつ。曹操が漢中をせめて支配下にいれたときのことである。彼はさらに劉備がたてこもる蜀地にも、軍をすすめるべきがまよい、「鶏肋（ニワトリのあばら骨）」という令をだした。部下たちは意味を解しかねたが、楊脩はいつた。「鶏肋は、くうほどの肉はないが、すすめるのはおしいぐらいのもの。つまり曹丕のは、「鶏肋」とき蜀の地はあきらめ「軍をかえそつと決心されたんだよ」。

『後漢書』によると、「こうしたことがかさなつたので、楊脩は曹操から嫌忌されるようになったといふ。操の行動を予見したような鋭敏ぶり。それが感心されるところか、油断ならぬやつとおもわれ、逆に警戒されたのだつた。さらに楊脩が、曹操にかつて敵対した袁術の甥であることもあつて、曹操は後患が生じるのをおそれ、けつきよく他事にかこつけてこゝしてしまつたのである。享年四十五。かくみてみると、楊脩の死にざまは、「出る杭は打たれる」や「策士、策におぼれる」を地でいったようなものだつたといつてよいであろう（後述）。

つづいて、丁兄弟についてのべよう。

まず兄の丁儀（？～二二〇）。彼の亡父の丁冲は、曹操と旧知の友であり、曹操に献帝を許にむかえるよう進言したこともあつた。そうした恩義もあつて、曹操は自分の娘の清河長公主（曹昂の妹）を、丁冲の子であり、また俊才の評判もたかい丁儀に、とつがせよつとおもいたつたのである。そこで曹丕に相談したところ、彼は反対するといふ。「丁儀は斜視です。女性はみた目を重視しますので、彼を氣にすることはないでしょう」。これによつて、この縁談はながれたのである。のち、曹操は丁儀と話をしたところ、才人だつたのがわかつて、結婚させなかつたのを、たいへん後悔したのであつた。丁儀のほうは、この件によつて曹丕をうらむようになり、丕植のあいだで立太子あらそいがおこつたときは、曹植のために尽力するようになったのだつた。

つぎに、弟の丁廙（？～二二〇）のほう。彼は才能と容姿ともにすぐれ、また博学の士でもあつた。曹操にかえて、黃門侍郎となつていた。彼も兄の儀にならつて、太子には曹植がふさわしいとかんがえ、曹操に曹植のことをほめちぎつた。曹操がその氣になつて、つい「自分も、弟の曹植を太子にしたいとおもつておるのじゃ」といつてしまふ。すると丁廙は、ことをえらびながらいつた。

どなたが太子になるかは、国家の存亡にかかわること、愚臣のごときが、口だしすべきことではございま

せん。ただへ子をしるのは、父以上の者はおらぬゝともうします。明公さま（曹操）は英明なうえ、よくお子さまをご観察されておられます。ただしくお選びなされば、上は天意にかなひ、下は民意を満足させることとでしよう。

この丁度のごときは、じつに慎重、また遠まわしな言いかたである。ただその趣意は、英明な曹操さまがお決めになれば、みなその判断にしたがうはずです、ということだろう。要するに、「曹丕を推奨する世論にそむいて」曹植をえらんでもかまわないのですよ、と示唆しているのである。このことをきいて、「太祖（曹操）は深く之を納れたり」だったという。

アピール合戦

こうして建安十九年ごろから、曹丕派と曹植派とのあいだで、後継をめぐるあらそいが本格化してきたのだ。た。

両派のあらそいは、現存の資料によるかぎり、曹植派のほうが攻勢をしかけ、曹丕派はそれをしのぎ、反撃している——という観がある。というのには、曹丕の側は、支持者に重臣や名士がおおかつたので、あまり太子の地位をつばいとるという気分がとぼしかった。なんといつても、曹丕さまは丞相さま（曹操）の長子だし、これまでの実績もじゅうぶんだ。熟柿がおちるのをまてばよく、いまさらジタバタせぬほうが得策だ、という考えがあったのだらう。いわば余裕があったのである。

じつさい、弟派の攻勢を警戒した曹丕に対し、重臣の買収はつぎのようにつたえた。「徳義をおもんじ、微官のごとくへりくだり、朝夕、孜々として子の道にしたがうこと。それだけでよいのです」。いうところは、下手

につごかず、篤実な姿勢を保持しておればよい。そうすれば、おのずから太子の地位はころがりこんでくるだろう、ということだ。曹丕はこの忠告にしたがって、これまで以上に行いをつつしんだという。

そうした曹丕不利の状況は、曹植派もよくしっていたのだろう。このまま拱手傍観するだけだったら、「長子の曹丕が太子になるべし」の世論がいよいよたかまり、挽回は不可能になってしまいかねない。そうさせぬには、三子（曹植）の評価をあげ、丞相さま（曹操）に「兄よりも、弟のほうが後継にふさわしい」と翻意してもらわねばならない。そのためには、なんとしてでも曹植の美点（もしくは曹丕の欠点）をアピールし、朝野の世論を逆転させる必要がある——こつした心理が、曹植派の行動をほげしいものにしていったとおもわれる。

では、具体的にどのようなアピールがおこなわれたのか。主要には宣伝工作に、力点がおかれたようだ。曹操にむかって、「太子には○さまがふさわしゅうございます」と推薦したり、献言したりするのである。たとえば、つぎのような話柄が典型的なものだろう。

魏の太子がまださまらぬころ、曹植は父から気にいられていた。丁儀らはさかんに、彼の美点を曹操に吹聴した。

そこで曹操は、邢顒に後継についてたずねてみた。すると、邢顒はこたえた。「少弟をもって長子にかえることは、先世でも戒めとしてありました。ぜひこのことを、とくとお考えください」。曹操は邢顒の意図をよく理解したのだった。

丁儀らが曹植の美点を曹操にふきこんだが、廷臣の邢顒が堂々と正論をのべて、曹植立太子に反対したという話である。この話でも、丁儀らは率先して、曹植の美点をアピールしている。これも一種の宣伝工作だといつてよからう。だが邢顒の反撃で、失敗におわってしまったのだった。この話においては、丁儀らは複数メンバーが

結託してうごいているが（原文に「丁儀等」とある）、刑顛のほうは、個人として意見をのべているようにみえる。つまり両派のあいだで、宣伝工作（美点の吹聴）がおこなわれており、しかもそれが、また攻（植側）と守（不側）、複（植側）と単（不側）、敗（植側）と勝（不側）でもあった点で、典型的なものだといってよからう。もっとも、この話はわかりやすいはあるが、まだ宣伝工作とはいいいにくいほど、まっとうなものだといふべきだろ。史書を検してみると、こうしたものはかりでなく、まさに「工作」というにふさわしい攻防も記録されている。いずれも真偽のほどは定かではないが、とりあえずは紹介してみよう。いずれも、『魏志』曹植伝注引「世説」におさめられたものである。

楊脩は二十五歳のころ、名門の公子で有能でもあったので、曹操によって重宝されていた。彼は丁兄弟とともに、曹植を操の後継者にしたいとおもっていた。いっぽう、曹丕は彼らの陰謀が心配だったので、車にボロ竹籠をのせ、そのなかに「側近の」朝歌令の呉質をひそませ「てよびよせ」、二人で対策をねった。楊脩は、これを曹操に告発したが、まだ調査するまではいたらなかった。

曹丕はこの楊脩の動きをおそれ、父に告発されたことを呉質に報告した。すると呉質はいった。「ご心配にはおよびません。明日また絹をつめたボロ竹籠を車にのせ、あやつをあざむいてやればいいのです。楊脩のやつは、きつとまた曹操にいつけます。二度めともなれば調査がはいりますが、なんの証拠もみつからない。さすれば、あやつは誣告の罪といふことになりすす」。

曹丕は、この呉質の策にしたがった。すると楊脩ははたして、再度曹操に告発したが、竹籠の中にはだれもいなかった。曹操はこれにより、楊脩に疑心をいだくようになったのである。

これも、曹植派の攻勢を、曹丕派がうまくきりかえした話である。曹丕は、楊脩のするどい察知能力におそれ

を感じていたが、謀臣だった呉質の献策によって、みごとに一本とっている。側近を秘密裏によびよせようとして、それをあばこうとしたりする、虚々実々のかけひきは、いかにも「工作」と称してよさそうだ。ただ、おもしろい話ではあるが、呉質を竹籠のなかに入れてよびよせるなど、常識的にはありえないことだといつてよい。類似のことはあったかもしれないが、おもしろおかしく粉飾された話であろう。

つぎも、『魏志』曹植伝注引「世説」からの話である。

楊脩はつねに曹植のそばについていて、植の言動に不備なことがないか留意していた。

あるとき楊脩は、曹操の考えを忖度しつつ、あらかじめ「曹植から」操への返答書十余条を作成しておいた。そして配下のものに命じて、曹操から下問があることに、順にその返答書を提出させたのである。そのため、曹操が植に下問すると、即座に返答書がもどってきた。曹操がはやすぎるのに疑念をもって調査したところ、そのからくりがばれてしまったのだった。

この話も楊脩の聡明さを前提としているが（『後漢書』にも類話があった。前引⁷）、事実だとはかんがえにくい。このとおりだったとすれば、曹植はまるで、楊脩のあやつり人形だったことになる。前述したように、曹植は少年時、すすんで曹操の御前にまかりでて、その難問にサツと返答したほどの俊才であり、かかる話柄はありえないとせねばならない。おそらく楊脩ゆかりのものが、おもしろおかしくでっちあげた話だろう。

つぎの話も、『魏志』曹植伝注引「世説」にひく話である。

曹操は曹丕と曹植とをそれぞれ、鄴城のべつの門からでてゆくように命じた。そして、こっそり門番に命じて出門を禁止させた。二人がどう対応するか、観察しようとしたのである。

曹丕は門までいったが、「門番に制止され」できることができずもどってきた。楊脩はあらかじめ曹植に忠

告しておいた。「門番がだしてくれなかったら、植どのは曹操さまのご命令をうけていますから、門番をきりころしてしまいなされ」と。曹植はそのとおりにした。こういうわけだったので、楊脩はけっきょく、植と共謀した罪でもって自尽させられたのである。

この話も、あやつり人形のごとき曹植像であり、ありえない。いくら放縦な曹植でも、こんな無分別な殺人はしないだろう。そもそも楊脩は、この一件で死をたまわったわけではない（前述）。この話、ひよっとすると、曹植が馳道をとおって、司馬門をあけてでた話（後述）と混線したものかもしれない。

以上、曹植伝の裴松之注にひく『世語』から、「工作」ふつ話柄を三篇ほど紹介した。いずれも興味ぶかくはあるが、おもしろすぎて、信用しがたいものばかりだとせねばならない。慎重な史家だった陳寿が、『三国志』のなかに採用しなかったのもとげんだろう。ただそうではあっても、裴松之がかかる話を収集してくれたおかげで、当時、両派によるはげしい抗争があったらしいこと、そしてその話柄をおもしろがって粉飾した人びとがいたことが、よくうかがえるのである。

丁儀の暗躍

こうした両派の抗争では、とうぜんのことながら、太子ポストの争奪だけでなく、さまざまな利害もからんできがちである。そのため、当人たちよりも、周辺の人物たちのほうが、よりはげしく対立し、攻撃的になりやすかった。なかでも曹植派の丁儀が先鋭的だったようで、彼は、曹丕支持派の人びとを誹謗し、失脚せしめんとし、はげしい攻撃をおこなったのだった。

その最たる被害をこうむったのが、崔琰だった。先述したように、彼は曹植の姻戚でありながら、曹丕の立太

子を主張していた。その崔琰、あるとき楊訓という人物を曹操に推挙した。しかしその楊訓、曹操をたたえる上表文を提出したが、軽佻な内容であり、人びとの鬻蹙をかった。崔琰はそこで草稿をとりよせてよみ、弁護する文を彼にかきおくった。ところがある者が、崔琰の弁護の文は世人を軽侮し、誹謗するものであると曹操に告発したのである。これを信じた曹操は、崔琰を逮捕して投獄し、ついに自尽せしめたのだった。

ところで、この崔琰の弁護の文を指弾した「ある者」というのが、どうやら、この丁儀だったらしい。「魏志」徐奕伝注引「傅子」に、丁儀が崔琰と曹操の仲をひきさいた。おかげで、崔琰は曹操から誅殺されてしまった(原文「武皇帝、至明也。崔琰、徐奕、一時清賢、皆以忠信顯於魏朝。丁儀、間之、徐奕失位而崔琰被誅」、とあるからである。ではなぜ、丁儀は崔琰をおとし入れたのか。その理由のひとつとして、崔琰の曹丕立太子の主張があつたろうとおもわれる。つまり崔琰は、曹丕を推薦したことによって、丁儀からにくまれ、まんまと謀殺されてしまったのだらう。

同種のことだが、剛直な廷臣だった毛玠の身の上にもおこつた。彼も曹丕の立太子を主張しており、さきの崔琰が自尽させられたことを、たいへん不満におもつていた。そのためだろう、彼がご政道を批判したと密告する者があらわれ、大理の鍾繇の尋問をつけるはめになつたのである。たださいわいなことに、このときは桓階や和洽の尽力によって、免職だけでゆるされ、ころされることはなかつた。

この毛玠がおちいった危機、これも、どうやら丁儀のさしがねだったらしい。というのも、やはり『魏志』桓階伝に、つぎのようにあるからである。毛玠は剛直すぎたため、仲間がすくなかつた。さらに西曹の掾だった丁儀からよくおもわれなかつた。おかげで丁儀からしばしば、その短所をあげつらわれたが、桓階らの力によって、なんとか殺害されずにすんだ(原文「毛玠、徐奕以剛蹇少党、而為西曹掾、丁儀所不善、丁儀屢言其短、頼

「桓」階左右以自全保」——と。つまり崔琰どうよう、曹丕の立太子を主張していた関係で、丁儀からにくまれ、あやうくころされかけたのだろう。

この丁儀という人物は、かなり功撃的な性格だったらしい。そのため彼は、当該の相手を自分に敵対する存在だとみなせれば、曹丕派の人びとだけでなく、だれであつても果敢に排除しようとしたようである。

そしてもう一グループ、丁儀から敵視された人びとがいた。それが、東曹の関係者であつた。右の毛玠の話柄で「西曹の掾だつた丁儀」とのべたが、丁儀はどうやら、この西曹という官署をおのが足場にしていらつた。この西曹は、人事をあつかう職掌だつたが、その一方に、また東曹という官署があつた。この二つの官署は名称からしても、おそらく対等な関係にあり、当時たがいに人事権や官位の高下をあらそう、競合関係にあつたようだ。そのためかどうかは判然とせぬが、西曹に属する丁儀は、競合関係にあつた東曹という官署や、そこに陣どる人びとを、みずからの敵対者だとみなすようになったのだつた。

たとえば、つぎのような話がある。徐奕と何夔とは当時の廷臣だつたが、やはり東曹の掾になつた経歴があり、いわば東曹ゆかりの人物だつた。そのためだろう、両人は丁儀にくまれ、あやうく害されそうになつたのだつた。

○「魏志徐奕伝」徐奕はまた東曹の属となつた。当時、丁儀らは曹操から氣にいられていたので、「その権勢をかりて」徐奕をころそうとした。だがそれでも、東曹から異動しなかつたのである。

「魏志何夔伝引魏書」そのころ丁儀兄弟は、曹操からかわいがられていたが、丁儀は何夔と相性がよくなかつた。そこで尚書の傅巽は、彼に忠告した。「丁儀は、貴殿をひどくきらつております。貴殿は毛玠と仲がよいようですが、毛玠は丁儀から迫害されました。ですから貴殿は、丁儀にちょっとへりくだつたほう

がよいですぞ」。何夔は……とこたえ、自分の意志をつらぬいた。

徐奕と何夔が、かく丁儀から敵意をむけられたのは、やはりともに東曹ゆかりの人物だったから（毛玠も東曹掾だった）だろう。⁸ また「丁儀らは曹操から気に入られていた」（原文「丁儀等見寵於時」）というのは、前述したような事から（曹植派の結成）を参照）と関係しているはずだ。旧知の丁冲の息子であり、娘の清河長公主（曹昂の妹）をとつがせようとしたりぐらいたったから、おそらく曹操は丁儀をたかくかっていたのだろう。そのため丁儀は、徐奕や何夔を威嚇できるほどの権勢をもっていたのだとおもわれる。

このようにみえてくると、丕植の後継あらそいは、周辺の人物や両官署（西曹と東曹）の軋轢もからんで、政治抗争のような観を呈していたといつてよからう。⁹ そうしたなかで、丁儀はとくに派閥意識がつよく、自分の反対派を遠慮なく攻撃する傾向があったのだった。そのため丁儀は、曹操派や東曹の人びとからおそれられ、またにくまれていたのである。

曹丕立太子

かく大勢のひとをまきこんだ立太子あらそいだったが、けつきよく曹植とその派の敗北で決着がついた。すなわち建安二十二年（二一七）十月、曹操は曹丕を魏の王太子としたのである。「五官中郎将「曹」丕を以て魏太子と為す」（『魏志』武帝紀）。楊脩や丁兄弟たち、曹植の立太子を期して力をつくしたが、功を奏することにはなかったのだった。

勝利した曹丕、父曹操が自分をえらんでくれたのが、よほどうれしかったのだろう。ふだん冷静な男だったが、側近の辛毗の首にだきついて、「辛どの、私がどんなにうれしか、わかるか」といったという。後日、

辛毗がこのことを娘の憲英にはなすと、彼女はあきれ去っていった。まあ、太子とは、君主にかわって社稷をつかさどることもある、責任重大な職務ですわ。恐懼するどころか、お喜びになるとは。魏国はだいじょうぶかしらられるぐらい、おお喜びしたのである。彼なりに、つよい危機感があつたのだらう。

では、曹操はなぜ曹丕をえらび、曹植をえらばなかったのか。いろいろ理由はあつただらうが、決めては、曹植の「性に任せて行つ」性格、とくにその放縦さだつたらう。それが父にはたえられなかったようだ。

直接のきっかけは、同年における司馬門での軽躁なふるまい（徐氏年譜二―三頁）だつたらうとおもわれる。すなわち曹植は、馳道に侵入して通行し、無断で司馬門をあけてでていったのだつた。この馳道は、皇帝専用の道路をいうが、ここでは曹操の専用道路の意だらう。そこを通行したというのは、自分が、天子もしくは曹操そのひとと同等の立場だと宣言したことになる。当時では、不注意ではすまされぬ、重大な規律違反なのだつた。

曹植はなぜそんなことをしたのか、史書は記述しておらぬ。おそらく、いつもの「性に任せて行つ」放縦な性格のゆえか、あるいは飲酒でよっぱらつたあけくの不始末だつたのかもしれない¹⁰。

曹操はこの軽躁なふるまいに怒りを発し、「おそらく曹植の身代わりに」馳道の管理責任者たる公車令を死罪に処した。さらに、その後が発した令には、つぎのような文句があつたという。「わしは当初、曹植こそもつとも大事を決せられる息子だとおもつておつたのじゃが「そうじゃなかった」「曹植がかつてに「馳道に侵入して」司馬門をでて金門にはいつてからは、いままでとはちがつ目で、あやつをみるよつになつた」「曹植がかつて司馬門をでていつてからは、わしは諸侯（息子たち）が信じられなくなつた。わしの外出時に、またおなじことをするかもしれぬからだ。だから、わしはいつも諸侯をつれて外出するよつになつた。あの曹植の言動によつて、

わしはだれを腹心として信用してよいか、わからなくなった」など。たいへんな怒りよつである。この事件以後諸侯（息子ら）への禁令は厳格になり、曹植への寵愛もおとろえたという。他の息子まで、とばっちりをつけてしまったのだった。

それに対し曹丕は、さきの賈詡の忠告にしたがって、じつに慎重かつ篤実にふるまった（前述）。「情を矯めて自ら飾る」。感情をおさえ謹直めかして行動したので、廷臣や宮女たちはみな、彼の味方をしたのだった。こうした曹丕の言動、意地わるく解すれば、偽善的なふうをよそおったとれなくもないが、むしろ、そうよそおえるだけの冷静さと忍耐つよさを、有していたといふべきだろう。だいいなときでも「性に任せて行い、自ら彫勵せず」という放縦な弟とはちがつて、曹丕は、はるかに冷静かつ忍耐つよく、ふるまうことができたのである。こうした丕植の性格の違いが、けっきょく曹丕の立太子につながったのだろう。

つづく失態

現代の我われからみると、丕植の後継あらそいは、この曹丕立太子で決着がついたように見える。だが、当時の人びと、とくに曹植派の人びとは、「これで勝負あつた」とはおもわなかつたようだ。それはおそらく、曹丕が曹丕を太子にしたと同時に、曹植の領邑を五千戸も加増し、あわせて一万戸の大諸侯としたことと、関係があつたのだろう。

この曹植への厚遇、父の曹操としては、兄の丕を魏の太子に任じたので、その埋めあわせとして、植にも加増してやったのだろう。曹植よ、なんじは太子にはならぬとも、これからもよく兄を補佐せよ。そして兄弟そろつて、わが魏国をもちたててくれよ。ついでには、なんじに五千戸を加増するぞ——ということだったのだろう。

それゆえ、曹植は立太子あらそいにやぶれたといっても、べつに敗残者や幽囚の身になったのでなく、依然として魏廷の柱石「のひとつ」だったといつてよい。

そうだとすれば、まだ挽回の可能性はないでもないはず。なんといつても丞相さま（曹操）は、突拍子もないことをなされるおかただ。もしも、将来なにごとか（曹丕が不始末をしでかす、病気になる、曹植が大功をあげる等）おこつたなら、立場を逆転させることもできないとはかぎらぬぞ。曹植派の人のびとはこうおもって、この曹植の五千戸加増に、一縷の希望をつないだのだろう。

ところが曹植やその周辺は、そうした父の期待をうらぎる不始末を、しでかしてつづけた。

まずは、楊脩の「鶏肋」事件である。曹丕立太子から二年後（建安二十四年、曹植二十八歳）、漢中をうばった曹操は「鶏肋」という謎めいた教令を発したが、楊脩はその意を察し、さっさと帰還の準備をはじめたのだった。この話は、楊脩の鋭敏さをしめすものではあるう。しかし結果的に、曹操から油断ならぬやつとつとまれ、同年秋にころされてしまったのだった（前述）。ただし、曹操の楊脩殺害に関しては、異説もすくなくない。

この時点では、楊脩が曹植の知恵袋だったということは、しれわたっていた。それゆえ、楊脩としてはよく注意して、「後継あらそいの「巻きかえしをねらっているな」とおもわれぬよう、一歩ひいておくべきだった。それなのに、つい曹操の心中を先読みして、「鶏肋」の謎ときをべらべらとしゃべってしまったのである。顯示欲のなせるわざだったのかもしれないが、慎重さが不足していたといわれてもしかたがない。カンのするどい曹操は、おもったのだろう。すぎた真似をする。こんなやつは、いかしておく危険だ。そのうちきつと、曹植復権のために、なにか事をかまえるにちがいない。変事がおこるまえに始末しておかねばならぬ。かくして曹操、「こつこにかこつけて」「あつさり楊脩をころしてしまつたのである。」

さらに同年には、曹植自身もおおきな失態をしてかした。八月、魏の曹仁が襄陽の地で、蜀の関羽に包囲されてしまった。そこで曹操は、いそぎ曹植をよびだし、曹仁救援の大役を命じようとした。これまで軍事に関して、重要な役どころにめぐまれなかった曹植にとっては、はじめての重大な任務である。以前から、戦場で勲功をあげることを熱望してきた曹植にとって、ねがってもない好機だといってよい。

ところがである。この絶好の機会に、彼は酒をのんで泥酔し、命を捧げることができなかったのだ。『魏志』本伝には、「酔いて命を受くこと能わず」とある。このときの曹植は、父の御前にもでられぬほど、グテングデンだったのだろう。たいへんな失態である。こんな大事なときに、曹植はなぜ、父の命をうけられぬほど、泥酔していたのか。いろいろ弁解はできるかもしれない。曹植びいきの人びとだったら、弁護したくなるだろう。じっさい、本伝注引「魏氏春秋」では、「このとき曹丕が弟にむりに酒をのませ、父の命をうけられぬようにした」などと弁じている。

だが、これは、ひいきの引き倒しにすぎまい。曹植はやはり、ふだんからだらしなくて、「いつ出陣命令がくるかもしれぬ」という心がまえと、そして自覚とがとほしかったのだろう。口さき（詩句）では「軀を捐て国難に赴き、死を視ること忽ち帰するが如し」（白馬篇）とか、「閒居は吾が志に非ず、心に甘んじて国憂に赴かん」とす（雑誌五）など、威勢のよいことをかたべていても（前出）、じっさいは「飲酒して節ならず」、酒浸りの日々をおくっていたのだった。

こんな息子の状況をみて、父の曹操はあきれはて、「是に於いて悔いて之を罷めたり」だったという。植のやつ、詩文をつくるのはつまいが、実態はこんな酔いどれにすぎなかったのか。われながら、かいかぶりしておったわい。さんねんじゃ。曹操はこうおもって、植を起用しようとしたことを「悔い」、任命をおもいとどまった

のだった。かくみると、曹植が真の意味で後継あらそいにやぶれたのは、この父を「悔い」させた瞬間だったのかもしれない。

武力の不行使

ところで、この丕植の後継あらそいで、もうひとつ注目したいことがある。それは、両派のあらそいは、武力にうつたえるのではなく、実態としては曹操へのアピール合戦（相手の誹謗もふくむ広義の宣伝工作）にすぎなかったということだ。いままでしめした事例もそうだったが、もうひとつ、典型的な例をあげてみよう。

以前、魏王（曹操）が出征しようとしたとき、太子（曹丕）と臨晉侯の曹植がならんで、道路のそばでみおくつたことがあった。曹植は父の功績を盛大にたたえ、じつに弁舌あざやかであった。左右の者たちは目をみはり、王もよろこんだ。太子は「これをきき」ただ茫然自失するだけだった。すると呉質が耳うちしていった。「魏王さまが出立されるとき、ただ涙をながす。それだけでよいのです」。

いざわかれの段になるや、太子はただ涙をながして、拝伏するだけだった。すると、魏王や左右の者まで、すすりないたのだった。ここにおいて、みな、曹植はことばたくみではあるが、誠実さでは兄におよばないとおもったのだった。（『魏志』卷二十一注引「世語」）。

このできごと、いつのことかわからぬが、呉質が知恵をつけているので、やはり立太子あらそいが、さかんなりしころだったろう。曹植は例によって、そう、少年時に父の御前にすすみでて難問に対応したように、また銅雀台にのぼってサツと「登台賦」をつくつたように、美辞をふるって大仰に父の出陣をたたえたのだろう。それに対し、曹丕はただ涙をながして拝伏しただけ。しかしそうした行為が、かえって誠実なものと評され、みごと

に一本とつたのだった。

この話 見かたによつては、たいへんいじましいし、ばかばかしいとさえ、感じられるかもしれない。こんなつまらぬことで、兄弟のなにがわかるというのか、とおもわれるかもしれない。しかし、当人たちはこうしたアピール合戦を、おおまじめにやっていたのだった。なにしろかかる演技の巧拙で、後継レースが優勢になったり、劣勢になったりしたのだから。

この曹操、自分の後継者をどちらにするかでまよい、そのおかげで、周辺もまきこんだらそいや抗争が発生したわけだが、そのあらそいの内実は、おおく右のようなアピール合戦に終始していたのだった。いいかえれば、不植のあらそいでは、武器を手にとつての大規模な戦いは、おきなかつたのである。これは地位や権力をあらそう抗争としては、めずらしいことだとせねばならない。これ以後の同種の抗争、たとえば西晋の八王の乱や宋斉における骨肉間の殺戮合戦を想起すれば、不植のあらそいは、例外的なほど平和であり、牧歌的な様相を呈しているといつてもよいであらう。

不植の後継あらそいでは、なぜかく平和かつ牧歌的な、見かたによつては、ばかばかしいアピール合戦に終始したのか。それはおそらく、曹操の権威が絶対的だったからであらう。父の曹操、自分の後継問題ではおおいにまよつたが、それ以外のことでは、まことに果敢であり、独裁的であつた。とくに軍権は、みずからがしっかりと掌握し、他人にかつてな干犯はさせなかつた。それゆえ当時にあつては、曹操の権力は、現代の我われの想像がおよばぬほどの、圧倒的なものだったのであらう。おかげで、いざとなれば武力にうつつたえ、競争相手はおろか、父君までも殺害して、権力を奪取してやろう——などというようなことは、とうていかんがえられない状況だったのである。

これに関連して、もう一事くわえれば、曹植はこの時期、自分の妻（崔琰の兄の娘、第一章の「おだやかな死」で登場した陳王妃とは別人）を父によってころされている。曹植の妻が刺繍した衣服を身につけていたのを、曹操が、たまたま台上からみつけた。すると彼は法令違反だとして（原文「以違制命」、妻を実家にかえらせ、死を命じたのである）『魏志』卷十一「注引」世説（一）におかた、儉約令にそむいたということなのだろう。

この話、前後の事情がわからないので委細は不明なのだが、張可礼『三曹年譜』百五十四頁は、曹植が父に愛想をつかされたことと関係があるうと推測し、この事件を曹植が立太子あらそいにやぶれた建安二十二年のこととする。私見によれば、さらに「妻の叔父の」崔琰の獄死や、反曹植派の策謀なども、あるいはこれに関係していたのかもしれない。

ところで曹植は、この妻の死と前後して、その妻がうんだ女兒一人にも死なれている。そのさい彼は、哀辞（「金瓠哀辞」と「行女哀辞」）をつくって、いとし子の死をいたんだのだった。だが、この妻の死に対しては、曹植はなんの感慨も、そしてなんの詩文も、のこしていないのである。おそらく、なんの感慨もわかなかつたわけではあるまい。おそらくこのときの曹植、さしさわりがあつて、おのが哀しみの情をことばや字句にすることができなかつたのだろう。

多感で感受性ゆたかだつた曹植が、妻の横死（法令違反だとして死を命ぜられた）に対し、なんの感慨ものこさず、なんの詩文もつくっていないこと（すくなくとも史書に記載がなく、現存もしないこと）、こつしたところに、父曹操のうむをいわさぬ権威と、そして非情さとがうかがえよう。曹植は、父がこつだとおもい、しかく実行したならば、どうしようもないとあきらめるしかなかった。哀しみの情をもらすことさえ、できなかつたのだろう。

かく父が絶対的な權威を有すれば、曹丕派も曹植派も、反対派の連中をおいおとしたくても、武力を行使することはできなかつたに相違ない。「曹操の許可をえず」かつてに兵をうごかせば、それによつてかえつて、自分の敗亡をまねかねなかつたからだ。いきおい不植のあらそいは、武力行使をともなつた内乱に發展することなく、右にみたような、いじましいアピール合戦にとどまらざるをえなかつた。かくして不植のあらそいは、後代によく発生したような、骨肉の殺戮合戦になることはなかつたのである。

牧歌的なあらそい

こうした「曹操の絶対的權威による」平和かつ牧歌的な状況は、立太子あらそいが決着したあとでも、おなじだった。曹植らはやぶれたあと、どつしていたのか。事後「にありえるしかえしへ」の対応策や一発逆転の秘策をねつていたのだろうか。いやそうではなかつた。彼らはなんと、うちそろつて賦を唱和しあつていたのである。

曹植派の中核メンバーだつた楊脩に、「孔雀賦」という作がある。徐氏『年譜考証』二百二十五頁は、この賦の創作年を「下にいうような理由で」建安二十二年（二二七）にかけている¹⁾。とすれば、曹植が立太子あらそいによぶれた直後につくつたことになる。賦本文はわずか八句の断簡だが、注目したいのは本文でなく、その序文のほうだ。そこには、つぎのようにある。

魏王（曹操）の園中に孔雀がいる。ずっとまえから池沼にすみつき、いまは他の鳥とおなじあつかいをつけている。この孔雀、園中にきた当初は、たいへん珍重されていた。ところが現在は「すっかりあきらめて、だれも見むきもしようとしない。」

臨淄侯曹植どのは、世の人びとの士人への対応のしかたも、これとおなじだと痛感された。そこで興をお

感じになられて、その孔雀を賦に詠じたのだった。わたくし楊脩も、曹植どのに唱和するよう命じられ、そこでこの「孔雀賦」をつくったしだいである。

これによると、この賦は、曹植に唱和を命じられてつくったものらしい。つまり曹植が、まず「孔雀賦」をつくった（現存せず）。そしてそばにいた楊脩にも、同種の賦を唱和させたわけだ。

この序文で注意したいのは、「曹植どの、世の人びとの士人への対応のしかたも、これとおなじだと痛感された」という発言である。この部分、楊脩が曹植の心境をおもいやったものだが、具体的にはどういうことか。それはおそらく、世の人びとは、はじめは孔雀を珍奇だとして称賛するが、やがてはだれも見むきしなくなる。自分（曹植）もそれとおなじで、以前は立太子の脈ありということでチャホヤされていたが、やぶれたいまとなつては、だれも相手にしてくれない——楊脩は曹植の心境を、こつ代弁しているのだろう。そしてその代弁は、楊脩が「曹操に警戒されたほど」鋭敏な男だったゆえに、そしてつねに曹植に侍していた側近だったゆえに、たぶんあたっているとしてよからう。

これが事実だったとすると、この賦および序文は、いろんな意味で注目される。

まず、曹植と楊脩の二人（他に丁兄弟たちもいたかもしれない）、巻きかえしの秘策をねるでもなく、「曹不派に」しかえしされる恐怖におののくわけでもなく、これまでとどうよう、のんきに賦を唱和していたのである。これは、やはり、父の曹操がいきているかぎり、曹不派の「武力にうつたえた」攻撃などは心配しなくてもよかった、という事情があったからだろう。不植のあらそい、曹操のおかげで、決着がついたあとでも平和であり、また牧歌的だったのである。

もうひとつ、曹植の心情にも注目しよう。「この序文からみるかぎり」曹植は、自分から人びとが離散してい

たのをかなしんでいるだけで、立太子あらそいにやぶれたこと自体は、それほどくやんではないようである。すると曹植はどうやら、本気で太子になりたかったわけでは、なかったのではあるまいか。そんなことより、大勢の者が自分のまわりにあつまってくれ、なにやかやとチャホヤしてくれること、そのこと自体がたのしかったのだろう。

私見によれば、曹植はおおざっぱ（性簡易）で、すぎかつてにふるまう（任性而行）ところがあり、いささか軽躁さももちあわせた男であった。それゆえ深慮遠謀とか権謀術数などは、縁のとおいい性格だったといつてよからう。とすれば、緻密な計略をねって、太子の地位を奪取しようというような野心は、はなから有していなかったのではないか（じっさい、建安二十五年に父が死去したとき、曹彰から後継を示唆されても、曹植は応じなかった。後述）。

ただこの曹植、子どもめいた顕示欲だけは旺盛だった。だから、楊脩や丁兄弟からチャホヤされるのがうれしく、彼らの期待にそむかぬよう、太子に意欲があるような言動をとっていたのだろう。それゆえ、立太子あらそいの勝ち負けにはそれほど執着しておらず、むしろ決着がついてほっとした。でも、自分に太子の目がなくなるとおかげで、周辺から急にひとがいなくなってしまうた。それはちょっとさみしいなあ——ぐらいの気分だったのだろう。

いっぽう、「武力につつまえないという点で」平和かつ牧歌的な状況は、曹丕たちもおなじであった。王粲が死んだとき、曹丕らはみおくりする場で、彼がすぎだつた驢馬の鳴きこえを模したことは前述したが、それは建安二十二年（二一七）春のことだ。立太子あらそいの決着は、まさにそのおなじ年の十月だったのであり、これもまことに、のんびりしたことである。さらに徐氏『年譜考証』二百二十頁によると、やはりこの年の前後、曹

丕は弟と「愁霖賦」などを唱和しあっていたらしい。

そうした状況は、立太子あらしの決着がついたあとでも、かわることはなかった。太子になれるときまった直後、曹丕はよろこんで辛毗の首にだきついたことは紹介したが、これなども、ずいぶんのどかで、子どもっぽい行動である。またその翌年には、曹丕のうまれたばかりの息子（曹芳、あざなは仲雍）が死んだ。するとどうした事情があつたのかわからぬが、曹丕は弟の曹植に、おのが亡子のための「曹仲雍誄」をつくってもらっている。こうしたところ、あいもかわらぬ友于の情だといってよからう。このように、彼も魏国の太子になったといつて、すぐ居丈高になって、曹植やそのメンバーを批判したり、殺害したりすることはなかったのである。

このように、太子あらしの決着がまちかにせまったときでも、また決着がついたあとでも、曹兄弟は「すくなくとも表面上は」親密な関係をこわそうとはしなかった。ライバルどうしの、かかる平和かつ牧歌的な交遊というものは、のちの南北朝の時代ではあまりみられなかったものである。これらはすべて、当時の魏国が、曹操というぬきんでた権威のもと、きちんと統制がとれていたからだったといつてよからう。

王仲宣誄の創作

この章であつかった二十〜二十八歳（建安十六〜二十四年）の時期も、曹植はおおくの名作をかいた。「文選」に採録された作だけあげれば

公宴詩、送応氏二首、三良詩、贈徐幹、贈丁儀、贈王粲、又贈丁儀王粲、贈丁廙、樂府四首、与楊徳祖書、与呉季重書、王仲宣誄

などが、この時期のものとなるう（推定もふくむ）。いずれも名作ぞろいであるが、私はこれらのなかから、と

くに「王仲宣誄」に注目したいとおもつ。

王粲が死んだとき、兄たちは驢馬の鳴きまねでみおくつたのだが、曹植はそれとはべつに、彼のために「王仲宣誄」という作をつくつた。この誄というジャンルは、儀礼的な文章であり、詩や賦とはちがつて、おのが意思で自由にかいてよいものではない。それゆえこの作は、おそらく王粲の遺族、そして父曹操や兄曹丕らとも相談のうえ、「では子建よ、おまえが亡き仲宣どののために、誄をかいてさしあげろ」と命じられ、いわば衆人を代表したかたちで執筆したのであらう。

この誄は、もとは亡きひとに誼ちひなをおくるさい、その由来を叙した文章だった。そうした実用性を有していたため、当初は内容も構成もほぼきままつていて、「この人物は、生前にこれこれの功業をなした。ついでに、この人物に甲という誼をおくる」とかかれることがおおかつた。そうした実用的性格が濃厚だったためか、前漢以前までは、あまり文学的にすぐれたものはかかれなかつた。ところが後漢末、士人のあいだで人物評論の気風がさかんになってくるや、誄や碑文のジャンルは故人を顕彰する絶好の小道具となった。その結果、後漢の張衡「司徒呂公誄」が典型だが、誄の文は大仰な褒辞や哀悼のことばでうめつくされ、陳腐な頌詞ふう行文になっていたのである。そのため、兄の曹丕は「典論論文」で、「銘誄は実じつを尚たもぶべし」と主張するほどだった。つまり、それほど「実」でない作がおおかつたのだらう。

そうしたなかで、曹植はこの「王仲宣誄」をかいたのである。

この作の特徴は、これまでの誄がありきたりな頌詞ふう行文に終始していたのをあらため、実感をともなつた哀悼の文に昇華させていることだ。そのため、陳腐な頌詞から脱して、真摯な称賛と哀悼とを有した「文学」になっているといつてよからう。具体的に例をしめそう。

まずは、王粲の俊才ぶりをたたえた部分。従前の誄では大仰な称賛ばかり叙されて、いささか空虚な感じをあたえた。経書由来の語彙を多用したり、「徳は堯舜につき、功は管仲にまさる」などの套言を叙したりしていたのである。ところがこの「王仲宣誄」では、

王先生は、博覧強記であられ、微言の真意もみぬかれておりました。文辞は春華のごとくはなやかでしたし、沈思は泉のごとくつきることがありませんでした。おことはそのまま詩句となり、筆を執ればそのまま一篇となりました。すべての学問にくわしく、あらゆる技芸に通じておられました。困暑もたくみで、博奕でも名手でした。

強記洽聞、幽讚微言。

文若春華、

發言可詠、

何道不洽、

梟局運巧、

思若涌泉、

下筆成篇、

何芸不閑、

博奕惟賢。

と叙される。漠然と徳望ぶりを叙するのではなく、王粲の才能の卓抜さに焦点をしばり、個性的にえがいているのに注意しよう。

まず、王粲の美質を「強記」「洽聞」と二点あげ、さらに「文若春華、思若涌泉」という巧妙な比喻をつづける。「春華」「涌泉」じたいは、珍奇なことばではない。だがそれを、「文は……のごとく、思は……のごとし」と対偶にしたのは、文思ともにすぐれる王粲の人がらを示唆しようとしたからだろう。また「下筆成篇」の語は、少年の曹植が父に自分をかたがたときにも、これに似たことば（下筆成章）を発していた（前述）。曹植の愛用の字句だったのだろうが、「王粲のごとく、このことばにふさわしい」とおもって、ここでも使用したのだろう。さらに困暑や博奕の腕前という、従前なかった「非儒教的な」雑技の才をもちだして、王粲の幅ひろい才能を示唆している。これも、従前の誄ではとぼしかった叙しかたである。

もつひとつ、こんどは王粲の逝去を哀悼した場面をみてみよう。それは、

私と先生（王粲）との信頼ぶりがたるや、「色のかわらぬ」赤と青よりも不変でした。また琴と瑟にまさるほど仲がよく、ただの友人以上でした。これからもずっと、協力してゆきたかったのに、どうして急に私をすてて逝去されたのか。

おもいだす、かつての宴席の場、私たちはともに志がたかかった。私は先生に冗談をいったものです。

「金石はこわれにくい、ひとの命ははかなく、吉凶ははかりがたい。この場でたのしむ者のうち、だれがさきに死ぬのでしょうか」と。ですが、先生がさきに死去するとは、おもいもありませんでした。また二人で、死生や存亡のさだめについて議論したものです。先生はこの問題に疑問を呈して、明抛をさがしもとめ、「もし靈魂があるのなら、天界で魂をあそばせたい」といわれましたね。私もできることなら、翼をかりて飄飄と空にのぼり、慶雲のつえにかけあがって、天上で先生の魂をまちうけたいものです。

吾与夫子、義貫丹青。好和琴瑟、庶幾遐年、携手同征。如何奄忽、棄我夙零。

「分過友生。

感昔宴会、志各高厲。予戲夫子、金石難弊。人命靡常、此驩之人、孰先殞越。

「吉凶異制。

何痛夫子、果乃先逝。又論死生、存亡數度。子猶懷疑、求之明據。儻独有靈、游魂秦素。

我將仮翼、飄颻高拳。超登景雲、要子天路。

という部分である。

ここでは、ただ常套的な悲哀の語句を羅列するだけでなく、曹植と王粲の個人的な交流をえがいている。曹植

は、自分の「金石はこれにくいが」云々や、王粲の「もし靈魂があるのなら」云々という生前のことはを想起しつつ、天上で先生の魂をまちうけたい、とかたっている。こうした発言は、二人だけかしらぬ生前の思い出を叙したものだ。こうした記述があることよって、「これからもずっと、協力してゆきたかったのに、どうして急に私をすてて逝去されたのか」という哀悼の情は、類型的で空虚なものになる弊からまぬがれている。かくしてこの誄は、称賛や哀悼が空虚にならず、真実の感情をもって読者の心をゆりうごかすのである。

ただかく説明してみても、この「王仲宣誄」の卓拔さは、よく了解できないかもしれない。そこで、さきに訳出した「平原懿公主誄」(第一章の「最期の年」とくらべてみることにしよう)。

この誄は、曹植最期の年の作で、甥(明帝)の亡き幼女、平原懿公主(本名は曹淑)のためにつくったものだった。なんといつても、天子の亡娘のための誄なので、洗練された悼詞でかざられた力作であるにはちがいない。たとえば、冒頭は「下をみれば大地がゆれ、上をみれば天文もみだれている。悲風がふきつけ、霜がおり雪がまう」(原文「俯振地紀、仰錯天文。悲風激興、霜飈雪雰」とはじまっている。これは、「かなしむ自然」という興きようふう措辞を前置して、悲痛の情をつよめようとしたものだ。こうした手法は、「野田黄雀行」詩の冒頭にもみられたもので、曹植の得意の叙しかただったのだらう)。

だが、この「平原懿公主誄」をかこうと筆をとったとき、王粲の誄のときとはちがって、曹植にはあまりにも情報がすくなかった。じつさい彼は、生前の公主を一度も実見したことがなかったはずだ。そのため、公主の愛らしさや賢明さをかたって、「ああ、亡き平原懿公主さまは、麗質をお持ちだった。ト占にかなない天運に应じてうまれ、美貌にめぐまれていた。聡明なおすがたをもち、神情は明朗かつ純一であった」(原文「於惟懿主、瑛瑤其質。協策応期、含英秀出。岐疑之姿、実朗実一」と叙するが、ここの記述、彼の天才をもってしても、実

感や真実味には、とぼしいといわざるをえない。それゆえこの誄は、人名をとりかえれば、他の幼女にも通用するような、儀礼的かつ類型的なものになってしまっているのである¹⁷⁾。

『文選』にもとられる名作の「王仲宣誄」は、曹植二十六歳のときの作であり、やや類型的な「平原懿公主誄」は、四十一歳という最晩年にかかれたものだ。通常の考えかただったら、二十代の作よりも円熟した晩年の作のほうが、よりたかい文学的価値をみとめがちだろう。しかし私は、『文選』編者の尻馬にのつかるわけではないが、個性的な風貌と真実の哀悼を叙した「王仲宣誄」のほうが、よりたかい価値をみとめたいとおもふ。

すると曹植の詩文は、年輪をますことに深化をとげ、文学性をたかめていったといふふうには、かんがえないほうがよさそうだ。つまり曹植はわかい時期から、すでにその天才を十全に開花させていたのである（第二章でとりあげた「七啓」は、十九歳の作だった）。それゆえ彼の諸作は、「創作年代の早晚は関係なく」そのときの状況や、その場の感興の強弱によって、通常の傑作になったり、たぐいまれな傑作になったりした——というふうに理解し、また評価すべきなのだろう。

(つづく)

注

(1) 同題競采については、拙著『六朝の遊戯文学』（汲古書院 二〇〇七）第四章も参照。

(2) この「曹倉舒誄」、あやまって曹植の作としたテキストもあるが、曹丕の作とすべきである。趙幼文『曹丕集校注』七百九十二頁を参照。

(3) 真偽はつまびらかでないが、『魏志』賈詡伝はこのあと、「太祖は大いに笑い、是に於いて太子は遂に「曹丕に」定まれ

- り」とつづけている。
- (4) ただし曹丕は、いつも私情をはさまないわけではない。彼は父の目がひかっているときは、慎重に行動しているが、父が死んだあとは、かならずしもそつではなかった。後述。
- (5) 政論としての『典論』については、渡辺義浩「曹丕の典論と政治規範」(『古典中国における文学と儒教』所収。論文初出は二〇〇九年)がくわしい。
- (6) 漢の献帝は、本名は劉協。靈帝の次男で、後漢最後の天子となった。「献」(正確には「孝献」というおくり名はめずらしいが、彼が政権を「漢から」魏にゆずり献上したので、この「献」字をもらったのだという。「漢を以て魏に禪^{せん}する。故に以て名づく」(『後漢書』献帝紀注引「劉澄之地記」)。この「献帝」の称号は、あたかも彼の功績は、この「献」一事にあったというのがときであるが、たしかに、「曹丕とともに」大量の血をながさず、おだやかな政権交替を完遂させたというのは、彼のおおきな功績だったのかもしれない。
- (7) この返答書の話、『後漢書』楊震伝附楊脩伝では、曹植とは関係させず、楊脩自身がなしたものとされている(『世説新語』捷悟もおなじ。ただし話に小異がある)。本文でもひいたが、楊脩は、自分の外出時も曹操の諮問のこたえようと、あらかじめ返答書をつくっておき、それを小僧に提出させた——という話である。そちらのほうが、まだ理解しやすいだろう。
- (8) 偶然かもしれないが、東曹に属する人びとは、太子あらしめいの場合では、曹丕に加担するひとがおおかつたことも注目される。じつさい、彼に攻撃された崔琰や毛玠は、兩人とも「曹丕派だった」とも「東曹の掾になった」という経歴を有している。こうした西曹と東曹の対立については、渡辺義浩「文学の宣揚」(『三国政権の構造と名士』第四章第三節汲古書院 二〇〇四)、石岡浩「曹植と丁儀 漢魏交代期における謀反の痕跡」(『アジア文化研究所研究年報』第四六号 二〇二二)などに指摘がある。
- (9) 曹丕と曹植の後継あらしめいについては、おもしろい話題であるためか、これまでおおくの論文がかかっている。それら

のうち、津田資久「魏志の帝室衰亡叙述に見える陳寿の政治意識」（『東洋学報』第八四号、二〇〇三）と大原信正「曹丕の魏王即位と曹操の後継者問題」（『中央大学アジア史研究』第三八号、二〇一四）は、従前の研究をよく咀嚼したうえで議論を展開されており、たいへん参考になった。

(10) 本文では『魏志』曹植伝によったが、『後漢書』楊震伝附楊脩伝にひく『統漢書』では、おなじ司馬門での失態を、

人に「楊」脩は臨淄侯曹植と飲み酔いて共に「馬車に」載り、司馬門より出て、鄴陵侯章（曹彰のこと）を謗訕すと白すもの有り。太祖之を聞きて大いに怒る。故に遂に收めて之を殺す。時に年四十五なり。

とする。この記事、曹植の単独行為とせず、楊脩をからませるなど（『文選』卷二十一「上責躬応詔詩表」冒頭の五臣注では、応場もこの狼藉にくわわっていたとする）、『魏志』曹植伝のそれとは異なるがあるが、曹植はこのとき「飲み酔いて」いたというのは注目される。これが事実だとすれば、この失態は、植の「飲酒して節ならず」（本伝）という性格に起因したものだっただろう。

(11) 袁濟言編著『魏晋才子伝箋証』（中国社会科学出版社、二〇一六）百七十五頁でも、「孔雀賦」の創作年を建安二十二年

(二二七) だろつと推測している。

(12) 「王仲宣誄」など曹植の誄作品の文学史的な位置づけについては、拙著『六朝文体論』第十二章でものべた。ご参照いただければ幸甚である。